

# 2016年7月 AJCC 研究報告

## >> アマチュア写真界こぼれ話 <<

会員番号0879 小滝 日出彦

アマチュア写真家とは、プロ写真家が顧客や雇い主のために写真を撮るのに対し、自分の『心を動かす何かを写真に表現しようとする人たち』である。

写真術がようやく実用化された時代のアマチュアの代表は、「不思議の国のアリス」の作者ルイス・キャロル。幼いアリスを楽しませるために童話を書き、集中力を要する湿板写真で「子どもの写真」を撮り、親たちの写真、その知り合いの写真を撮った。

子供にも写真が撮れるようになった20世紀初頭を代表するアマチュアは、アンリ・ラルティエグである。

私は、ルイス・キャロルとアンリ・ラルティエグを見て、アマチュアを二派に分類した。

A派は、家族写真、友達写真と範囲を広げて撮り溜めるうちに、自分史写真を越えてある地域、ある時期の歴史を記録する役割を果たした人たちである。

B派は、写真を評価されたい、褒められたい、という動機で写真を撮る人たち、である。

アンリ・ラルティエグはA派の先駆けだ。

ママの友達の女優さんも、ぼくの新婚旅行のホテルの部屋も、みんな写真に撮っておく。そうして出来たアルバムが後に世に知られて、バルエポック・フランスの「記憶」になった。

大原治雄の写真は、ブラジル日系移民開拓史の見事な記録になった。



物乞いに扮したアリス(写真左)、鏡の国のアリス(写真中)とその演出写真(写真右)/ルイス・キャロル

大きなカメラを持つアンリ・ラルティエグ

昭和2年、ブラジルの奥地ロンドリーナに入植した大原治雄は、開拓した土地で家族の写真を撮る生涯を続けた、A派アマチュアだ。(10月22日から清里フォトミュージアムに巡回写真展がきます。)

ヒロシマ・モナムールの女優エマヌエル・リヴァがロケの合間に取った写真は、私たちの少年時代の記憶を呼び覚まし、戦災から復興していく広島、日本の、記録になった。

リヴァもA派だ。

A派のアマチュアは『心を動かす何か』に迷いが無いから、何を写すかに迷わない。だが、その業績が世に知られ、評価されるのは晩年になってからだ。

B派のアマチュアには、何を写すか、が問題だ。写真雑誌が何をどう写すかの答えを提供する。

自分が褒められたいというアマチュア写真家の競争意識は「歌合」以来の伝統である。「俳諧の宗匠」による指導、「生け花の家元」のようなシステムをアマチュア写真界に派生させた。B派は写真材料商や職場のサークルの例会、写真雑誌などの懸賞写真の投稿者になった。

B派のアマチュアが、何に導かれ、惑わされてきたか、80年ほど遡った昭和10年(1935年)から20年間、昭和30年(1955年)までのアサヒカメラ50冊あまりを詳しく読んでみた。

昭和10年、11年は暗室技術の指導記事が多く、11年12月号には、福原信三の「大正末に撮った傑作」4点が掲載されている。大正デモクラシーの余韻が長く続いたのだろう。

昭和12年は戦前の生活水準のピーク。印画紙の生産量はこの年が頂点で、戦後その生産量に回復したのは昭和27年だった。



ママの友達の女優さん(左)と僕の新婚旅行のホテルの部屋(右)/アンリ・ラルティエグ

初めて撮った妻の写真(左)と子供の写真(右)/大原治雄



1958年の広島の子供達  
エマヌエル・リヴァ



昭和10年12月号



昭和14年6月号



昭和15年10月号



昭和24年10月  
アサヒカメラ復刊

昭和12年5月号にはスターリン主義の「リアリズム写真への道」という翻訳論文が掲載され、まだ「赤狩り」検閲はない。この頃はアサヒカメラ主催の撮影会も盛大だった。昭和13年4月にはサンフランシスコ航路の大洋丸1万5千トンで神戸から横浜への航海中24時間で撮影会を行った。昭和14年5月には、シアトル航路の平安丸1万2千トンで2泊3日の撮影会を開催。観音崎など要塞地帯は写さぬこと位の制約はあるが、モデルに松竹の女優二人を乗せ、神戸から横浜に行く。船中でDPEを行い、船中誌も発行した。

欧州文化への憧れとファシズム心酔が一体となった空気の中で、中ソとの軍事衝突が頻発していたにも拘わらず、このような贅沢を楽しむ余裕があった。だが、昭和14年9月にドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発すると、写真の自由はいっつきに息の根を止められてしまう。

昭和15年10月号の表紙、日本軍が仏印まで侵攻した頃の大東亜共栄圏の版図を浮き彫りにしたモニュメントが写っている。本文中には「写真と防諜座談会」という記事が掲載された。陸軍省のW少佐という軍人が座談会を仕切っている。W少佐という「匿名」が軍の誰でも国民を監視しているぞという雰囲気を書き合わせる。「本誌：法律で写真撮影を禁止した場所以外は、警察でも禁止することは出来ないのですから」不都合な場所は相互監視しようと言うと、「W少佐：法律で禁止されていなくても、日本国民にそうゆう観念を植え付けていけば、効果がある」という。なにが「秘」であるか法律を見ても分からないから、相互密告社会になってしまった。これでは写真機を箆箆にしまっているだけでも危険だ。

戦前のアマチュア写真家のレベルを考えると、私はその最高峰の人物として安井仲治を挙げたい。掲載されたのは戦後、昭和28年7月号。撮影は昭和16年。「さまよえるユダヤ人」の中の一枚。同盟国ドイツを慮って当時

は発表できなかったのか。昭和17年、安井は病没した。杉原千畝の査証発行は昭和15年7月8日だから、助かって日本に来た難民であろう。見事な写真だ。

アサヒカメラは昭和17年には厚さわずか3ミリにやせ細り、勲章だらけの東条英機が表紙になった2月号で休刊になったという。

敗戦から4年、昭和24年10月にアサヒカメラ復刊第1号がでた。

戦勝国のリーダー、アイゼンハワーとチャーチルの肖像写真が載り、米空軍が日本の象徴たる富士山を見下ろしたパノラマ写真が載っている。おそらくGHQの検閲があつて、敗戦国の惨状を示す写真は載っていない。すでに日本製のカメラ、レンズは輸出先で評価されていて、英国のカメラマン、ウィリアム・ハーヴェイはサン・ソーラレンズの優秀さを見事な事例で紹介し、キヤノンとセレンナーも褒めている。

日本のアマチュアは、サン・ソーラのような中小メーカーの安くて良い製品を活用すべきだった。

昭和25年1月号には、「戦後の課題を語る」座談会が掲載され、星野辰男(戦前のアサヒ編集者)、浦松佐美太郎、渡辺義雄、浜谷浩が「アマチュアは何を撮るべきか」を中心に現状批判と指導方針を話し合った。

「写真界で批評活動、鑑賞指導が発達しない原因は」という問いかけに、浜谷は「写真には、絵画の場合のような学ぶべき古典がない」と言った。浜谷の指摘への回答は、海外の写真家を次々に紹介する企画で一部は実現していくが、「批評活動」は難しい課題であり続けた。

これは、「文化人」が敗戦によって自信を完全に喪失した結果、批評のよりどころを失ったことに起因するのだろう。志賀直哉は、日本人は日本語を捨てフランス語を母語とすべきと宣うた！ アサヒカメラは自信のない写真家ではなく画家に「口絵」や表紙の画面構成

を委ね、写真について意見を求めた。

「Occupied銀座」をみても動じなかったのは足が地に着いた庶民のほうだろう。

「批評の問題」はどうなったのか。昭和25年3月号に《作家と作風を語る》という座談会が載った。金丸重嶺、伊奈信男、浦松佐美太郎らが、林忠彦や大竹省二、三木淳など活躍中の写真家に歯に衣着せぬ批評を浴びせた。これが反発、反響を呼び、批評を拒否する言動もあつたらしい。伊奈信男は、作品が公衆の目に触れたとき批評活動は始まっている、見た感想を表明するのは『批評の自由』だといひ、浦松佐美太郎は、作品に対する批評を自分自身が批判されたと思ひ違える人が多い、とたしなめた。これは写真批評の難しさを認識させる事件だった。

昭和25年6月に朝鮮戦争が勃発すると、表紙にも身にも兵士の写真が溢れだす。戦場撮影に来たライブ誌カメラマンとその機材は日本レンズの神話を生み出した。

三木淳は戦場カメラマンにニコールが支持された経緯を語り、神話の語り部となった。ダンカンの写真、三木の関心はダンカンの目の表情より手に持つカメラにある。

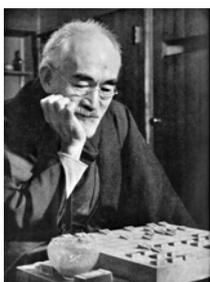
アメリカは不利な戦況を隠さず報道した。大東亜戦争で大本営は大日本の負け戦も負傷兵も一切「秘」としたから民間日本人が戦場の実態を身近なものとして見るのは初めてだっただろう。

写真批評の準則など見出しぬうちに、雑音が入り出す。

ロマンティシスト民俗学者柳田国雄は篤実な日本農民の顔はかくあるべきと言った。するとそれに呼応する写真が月例に入選しひとつのステレオタイプが生まれた。



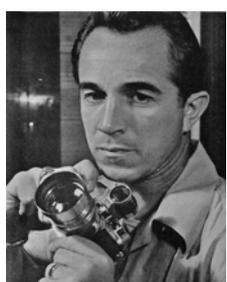
さまよえるユダヤ人  
安井仲治



志賀直哉  
渡辺義雄



OCCUPIED銀座  
(昭和25年6月号)



デヴィッド・ダンカン  
三木淳



負傷者  
カール・マイダンス



昭和26年2月号



農民の顔/浜谷浩



月例一等



銀座座風俗/吉岡專造特写



ウェルナー・ビショフの  
「朝鮮の子供」  
《僕らもこうだった》



カルティエ・ブレッソンの  
「マチスの生活」

昭和26年10月号の特写スナップに花森安治の写真批評ならぬ風俗評が付けられた。そのまま二つだけ載せる。花森にはこんな悪口を浴びた女性が負った心の傷など少しも分からない。本当に人格者なのか？

《近頃の銀座は特にヌカミンの匂いが強い。何とかヘン景気で出たボーナスが白いバッグと、たった一着のワンピースに化けた。下着がキチンとしていないで上べだけ、ともかく流行的なのがヌカミンの特徴である。》

《ヤキモチとか羨望、侮蔑などという表情は原始的本能らしい。ふりかえってニタリと笑った表情がゴッホ描くカナカ土人にハウツツしている所以もそこにあるのだろう。》  
ゴーギャン描く、と言わないのは、アンドレア・デルサルトル曰く、を捏造した迷亭をまねたのか。

日本の写真界はファッション写真を批評するバックグラウンドを持たなかった。『フォトグラフィー編集長ダウズ氏を困んで』という座談会で、三木淳は「ああゆう写真は着せ替え人形というのですね。写真家のイメージネー

ションを働かせる余地は許されていない・・・」と見識の狭さを露呈。

ダウズ氏「写真の新しい芸術が生まれるのは、ヴォーグやハーバースから」と。

アサヒカメラは日本で見るのでできなかった海外の著名写真家を次々に紹介した。

月例アマチュアの受けた批評のレベルは次の如し。

「カメラはもっと低い位置で、おそらく左の方へ走っていく男の真正面あたりから、火炎を背景に狙ったら、迫力を持った写真になっていたと思われる」

写真を公表するアマチュアは、モデルが十年後にも傷付くことがないように配慮すべきだろう。子どもにも人格がある。

アマチュア写真家は表現の自由を謳歌していた。益田氏(アマチュア?)が「ニコンSで撮影「ニースで崖の上からのり出してシャッターを切った」という表紙写真。プライバシーという人格権に無知の時代だった。

昭和30年8月号に載った「カメラブーム放

談」。結婚式に写真を撮りに来たカメラマンについて、  
高峰秀子「式のあとじゃ夕刊に間に合わないからって、戸を蹴破ってザーと教会の式場に入って来ちゃった」

中島健蔵「そうゆう無礼なことをアマチュアはしません」

高峰「それを加害者はアマチュアだってあっちこちに書いていました。それで教会は怒っちゃってもう映画女優には貸さないって」  
中島「それは写真道に反するな」。

アマチュアは他人の人格を尊重する個人として「写真道」を極め、自ら判断して、自主規制せず、空気におびえず、空気に流されず、表現の自由を守ろう。

50冊のアサヒカメラを読み直して、日本のアマチュアが木村伊兵衛先生に教わったことがいかに多いかを実感した。感謝をのべて本稿を終わる。



昭和28年8月号の表紙  
ヴォーグの写真家  
ジョン・ローリングス撮影



月例二等「火事」



月例二等「オネシヨ」/田中光常



昭和29年1月号



昭和30年7月号 船山克撮影「デコ結婚す」



ムッシュ・キムラ/カルティエ・ブレッソン